

(研究ノート)

看護社会心理学への一試論

—臨床社会心理学としての「看護」への視点—

足 立 叡

はじめに

筆者は、本学社会学部社会学科の「専門科目Ⅲ（「看護関連専門科目」）」の一つとして平成13年度前期から開講された「看護社会心理学」の講義を担当した。筆者は本学では今まで社会福祉学科において、社会福祉の専門科目の講義等の経験はあるが、こうした社会福祉の専門そのものではない講義科目を担当するのは初めてであり、当初この講義を、自分の専門ではない「看護」に関して、しかも「看護」を必ずしも専門としていない学生諸君に対して、どのような視点で、どのように講義全体を構成しようかと戸惑いながらも、一回一回の講義を試行錯誤しながら、平成13年度前期その講義を終えた。そこで本稿は、講義を終えて改めて、筆者がその講義において目指した「看護社会心理学」への視点とその問題意識をあくまでも「一試論」として概念化し、看護という対人的営みのもつ臨床社会心理学としての意味の明確化に向けての素描を試みることをその目的とするものである。

Ⅰ．看護社会心理学を構成する二つのアプローチ

—「看護についての社会心理学」と「看護からの社会心理学」—

いわゆる「看護学」の専門的な知識と技術の内容そのものについては素人にすぎない筆者が、それにもかかわらず看護というものを社会心理学の主題として採り上げるに際し、そのための主たるテキストとして本稿では近代看護の創始者であるフロレンス・ナイチンゲール (Nightingale, F.) の看護論の古典的名著として高く評価されている「看護覚え書」⁽¹⁾と、さらにはオランダの精神医学者であると同時に歴史心理学者でもあるヴァン・デン・ベルグ (van den Berg, J.H.) の「現象学としての看護」⁽²⁾の二つを採り上げ、そこで指摘されている対人的営みとしての看護のもつ人間理解の原理的な視点をその考察の基礎としたい。なぜならば、

(1)

これら二つの看護に関する論考は、後述するように、看護という対人的行為や営みの中に実は社会心理学としての人間理解の視点をその原理的可能性において見出している、ないし見出そうとしていると筆者には思われるからである。

(1)「看護についての社会心理学」への視点

そこでまず上述の二つのテキストに基づく検討に先立ち、看護を「看護社会心理学」として主題化し、問題にするときの、その一般的な主題化の仕方について確認しておきたい。

通常、社会心理学のみならず、心理学、社会学を含めて、人間と社会に関する基礎的学問にとって、それらが人間と社会の個別領域の現象や問題を取りあげるとき、その個別領域の現象や問題は、それら基礎的学問において確立された視点や方法に基づく分析や考察の「対象」として「応用」的に主題化されるといえよう。その意味で看護を「看護社会心理学」として主題化するということは、いうまでもなくそれは「看護についての社会心理学」、すなわち看護という「人間の行動」と、その「行動の場」のもつ意味を社会心理学の視点と方法に基づいて概念的に分析し、説明することを目的とするといってもよからう。したがって「看護社会心理学」への視点をこうした「看護についての社会心理学」として主題化することは、現実の看護の現場で日々多忙な業務に追われ、自らの対人的行動の意味がその体験においてハッキリせず、未整理なままであるが故に、看護者としてのアイデンティティをもてないで悩んでいる現場の看護者の人たちにとってはとりわけ意味をもち、その社会心理学的概念化は自らの看護行動の明確化の助けとなるといえよう。またそのことは、看護の現場のみならず、さらには看護者をめざして看護を専門的に学んでいる看護学生にとっても同様のことがいえよう。

例えば、筆者が長年、社会学という科目で出講している或る医療短期大学の看護学科の2年生の学生の平成13年度前期の講義終了後の感想文⁽³⁾からもそのことは十分にうかがい知ることが出来る。その中のいくつかを原文のまま以下紹介しておきたい。なお、感想文を課した際のテーマは、「看護にとって社会学の授業のもつ意味は何であったか」である（冒頭のインシヤルは、その感想文の学生をさす）。

U. I

初めは社会学と看護のつながりがよくわかりませんでした。毎回の授業を聞くたび、その重要性に気づきました。社会学で学んだことは、看護婦の役割、看護婦と患者の関係を客観的にとらえることにより、その関係を成立させる上での重要なポイントを知るということだと思います。

I. M

私にとっての社会学のもつ意味は、自分の中であいまいであった看護の意味がはっきりしたことである。社会学の講義を受ける前までは、医学的な知識の勉強が多かったためもあり、やはり看護は医学の一部なのだろうか？ 看護と医学が分かれている理由はなんなのだろうか？と感じている部分があった。しかし、医学は患者の疾患に目を向けていて、看護は患者を社会的生、関係的生としてとらえる関わりの中で、その機能の回復を助けることであることがわかった。

A. S

社会学が必修でよかったと思っている。学校の看護ゼミナールの授業で「患者－看護婦関係」について考えているのだが、そのゼミナールでの話し合いの中で社会学の授業が参考になっている。看護系の文献だけでは得られない社会学から見た人間関係の考え方がとてもよかった。

N. K

社会学は看護学とはまったく違う分野だ。援助技術的なこともでてこないし、医学的知識もほとんどでてこない。なのにどうして看護を行ううえでのとても大事な事がたくさんでくるとのさ。きっとそれは、私たちが社会の中で生きているからだ。

T. K

正直、何故社会学が必要なのか分かりませんでした。でも、看護を社会学の目でみると様々な発見があり、より看護学が深まった気がしました。

S. M

今まで形がなく、なんだかややもやしていたものに、形ができ、枠組みができた。形ができることで「なんとなくこう思う」が「こうだからこう思う」に変わったように思う。

ここでの筆者の社会学の講義は、看護学生が対象であるということを考慮し、その内容はオーソドックスな社会学というよりも、人間関係、集団と個人、コミュニケーション、役割と人間等の、どちらかといえば社会心理学的なテーマを、看護の実践に係わる事例や体験を援用しながら解説することによって、看護行動や看護実践の社会心理学的な概念化を学生に対し提供したものであり、上に紹介した感想文はそうした講義に対する学生の応答の一部である。こうした看護学生の感想は、その表現は未だ素朴ではあるが、しかし、看護者や看護学生にとって、看護の本体を構成するその専門的知識や技術の習得や学習だけでは見えてこない、自らの看護行動のもつ意味を明確化したいという期待に基づく感想であるといってもいいのではなかろうか。したがって、「看護社会心理学」へのこうした視点、すなわち「看護についての社会心理学」という主題化は、「看護にとって社会心理学がもつ意味」を看護の教

育や実践の場にあきらかにしていくことにその教育的な役割と意義を有するといえよう。

しかしさらに、「看護社会心理学」を構成する、すなわち看護を「看護社会心理学」として主題化し、問題にしていくもう一つの視点に同時に目を向けていきたい。それは、上にみた看護を社会心理学の考察対象とする「看護についての社会心理学」の視点に対し、むしろ看護そのものを社会心理学として、言い換えれば、看護という人間の対人的行動とそこにおける人間の対人的理解の方法を「社会心理学」としてとらえていく視点である。それはいうならば「看護についての社会心理学」に対し、「看護からの社会心理学」あるいは「看護に学ぶ社会心理学」とでもいうべき視点である。さらにいうならば「社会心理学基礎論」⁽⁴⁾として看護をみていく視点である。本学社会学部における「看護社会心理学」の講義の受講生の多くは、いうまでもなく看護を専門として学ぶ学生ではなく、社会学と社会福祉学を専門とする学生である。したがって、当講義の主題化が、その主題化の第1の視点である「看護についての社会心理学」に終始したならば、当講義への学生の取り組み方は、例え看護に対する関心や興味において真面目であったとしても、その根底にはどこか看護に対する門外漢意識を払拭しがたく、結果的に傍観者の関心を超えることは難しいと思われる。それゆえ、本社会学部の専門科目としての「看護社会心理学」への視点として、第1の視点にもまして、この第2の視点からの「看護社会心理学」の意味、すなわち「社会心理学にとって看護のもつ意味」を明確化することが求められるといえるのではなかろうか。そこで次節では、もう一つのこの第2の視点について、先述した二つのテキストにおける指摘と見解を手掛かりにその検討を試みたい。

(2)「看護からの社会心理学」への視点

—社会心理学としての看護を考える—

さてそこで、看護がその原理的可能性においても社会心理学としての視点と方法について、それを「看護からの社会心理学」として主題化していくための手掛かりとして、先述したように、フロレンス・ナイチンゲール(1860)の看護の基本的な考え方と、そのナイチンゲールの看護論のもつ「人間の科学」としての視点と方法を現象学的観点からあきらかにしようとしているヴァン・デン・ベルグ(1982)の指摘のいくつかに着目し、その意味を考えてみたい。

周知の通りナイチンゲールの「看護覚え書」という著作は、看護論の古典的名著として高い評価を得ている書であるが、しかしながら、私たちがもしこの書に、いわゆる患者の心身の状態に対する看護ケアや看護技術のあり方それ自体への期待をもって接するならば、その期待は大方のところ裏切られるといえよう。事実ナイチンゲール自身もその最後の章である「補章(Supplementary Chapter)」の冒頭において、「この本は、看護という仕事の持つ趣

きや面白さをすべてとり去ってしまい、人間の仕事のうち最も無味乾燥でつまらないものにしてしまった、と人びとはいうであろう」⁽⁵⁾と述べている。何故なら、この書は、患者の個体としての病気についての医学的な考察や患者の心理的な状態とそれへの対処といったことについての記述ではなく、そのほとんどすべては、病む人の生き、生活している世界ないし環境についての記述であり、その生活世界や生活環境へのリアルな観察に基づく具体的なアプローチとして看護がとらえられ、論じられているからである。実際この書の内容は、病室の換気と暖房、住居の管理、食事や食物、ベッドと寝具類、陽光、部屋と壁の清潔といった項目で構成されている。しかし、ヴァン・デン・ベルグは、こうしたナイチンゲールの視点こそ、病いを生きている「人間」へのまさしく看護の理解の視点であるとし、それを「患者を理解するとは患者の世界をわかっていくこと」であり、「看護とは患者の世界をととのえることだ」と指摘する。⁽⁶⁾つまり、ナイチンゲールの採り挙げている病室や住居、また食事や食物、さらにはベッドや寝具、そして窓からの陽光といったことがらは、それはいわゆる物理的な環境それ自体を意味しているのではなく、それらは実は患者の生きている世界そのものなのである。したがって、もしそれらを文字通り環境それ自体としてとらえ、それらを患者の生きている世界として理解していかない限り、ナイチンゲールが自ら言うように、その書は看護を無味乾燥なものにしてしまった、と誤解されるといえよう。だからこそ、ナイチンゲールはその言明のすぐ後に続けて次のようにキッパリと断言しているのである。

「この世の中に看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち、自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである。—そして、もしあなたがこの能力を全然もっていないのであれば、あなたは看護から身を引いたほうがよいであろう。」⁽⁷⁾

ここで、ナイチンゲールが「他人の感情のただ中」といっているのは、したがって決して「個体としての患者の内面」ということではなく、それは「世界—内—存在」(In-del-Welt-sein)としての「患者の生きている世界」を意味していることはいうまでもないであろう。さらに上述の言葉の「自己を投入する能力」とは、患者の「生きている世界」を注意深く観察する能力を意味している。そして、この観察ということに関してナイチンゲールがさらに次のように述べていることは極めて注目に値すると思われる。

「ほんとうに注意深い看護婦が、彼女がほんとうに知っていなければならないこまごまとしたことを知るのは、じろじろと患者を見詰めることによってではない。私の知っている最も優れた観察者、彼は精神病患者たちと関わって成し遂げた仕事によってヨーロッパじゅうから感謝をあつめている男性であるが、かれは一見したところ、ただぼんやりとしているように見える。彼は半ば目を閉じて椅子にもたれているだけである。そして、そうしている間にすべてを見、すべてを聞き、すべてを観察する。そして人びとは、

20年も生活を共にしてきた人たちよりも彼の方が、自分についてよく知っている、と感じるのである。精神病患者たちに及ぼした驚くべき影響力を彼にもたらしたものは、この優れた観察能力と、観察した現象に含まれている意味を理解する能力とにほかならない、と私は信じている。」⁽⁸⁾

そして、そうした注意深い、優れた観察能力をもった看護婦は、例えば患者の排泄物の状態の観察の際、「排泄物の外見を見たとき、ちょっとした色の変化があるだけで、彼女の鋭い観察眼は、排泄のたびに便器が空けられていなかった事実をも見破ってしまうであろう」⁽⁹⁾とも述べていることから、ナイチンゲールにとって、その看護的観察はどこまでも、患者個人の体や心そのものではなく、患者の生きている世界に向けられていることを意味しているといえよう。ナイチンゲールのこうした看護における対象の理解の仕方、すなわちヴァン・デン・ベルグによれば、いわゆる医学のように患者を「病んでいる身体」として扱うのでもなく、またいわゆる心理学のように患者を「病んでいる心」として扱うのでもない、その対象をどこまでも患者の「病んでいる世界」⁽¹⁰⁾として理解していこうとする視点こそ、看護がもつ社会心理学としての原理的な可能性を意味しているといえるのではなからうか。そして、そうした人間への看護的かわりとそこでの観察の営みの原理的な可能性の方法論的な明確化こそが、看護社会心理学を「看護からの社会心理学」として主題化することの意味であり、その主題化はさらには看護そのものをⅡでみるように「臨床社会心理学」として概念化することを可能とするのではないであらうか。そしてそうした主題化と概念化において初めて、看護を必ずしも専門としない者にとっても、看護社会心理学の学びは、傍観者的なそれではなく、自らの主体的、関与的なそれとして体験されるといえるのではないであらうか。さらにはまた、そうした看護への視点と方法は、「患者」「病む人」という対象の限定を超えて、社会的存在としての「人間の理解」を、或いはまた、人間を「社会心理的存在」として理解していくことを目指す社会心理学の「臨床的」な視点と方法としての意味を持ち得るといえるのではなからうか。そこで次にⅡではそうした意味で看護を「臨床社会心理学」として性格づけ、その概念化を図っていくための一、二の概念的検討を試みておきたい。

Ⅱ. 臨床社会心理学としての「看護」への視点

—看護における「臨床」の意味とその概念をめぐる—

(1) 「看護」概念への方法論的視点

さてそこで、看護を「臨床社会心理学」として性格づけ、その概念化を図っていくに際して、まず「看護」という概念を、通常理解されているように、いわゆる看護という領域の援助技術概念としての枠に止めてしまうのではなく、それを改めて、人間にかかわる科学や学

問にとってもつ方法論的な意味を有する概念として捉えようとしている、中川米造(1994)と内田義彦(1973)における看護という概念へのそれぞれの視点に目を向けてみたい。

医学者としての立場に身を置きながら、長年自ら携わってきた医学教育における疾患や臓器中心の患者理解に生涯にわたって警告を投げかけてきた多くの業績をもつ中川米造はその晩年の著作⁽¹¹⁾において、病む人間へのかかわりとその理解における二つの認識を提示する中で、そこにおける「看護的認識」の意味について次のように述べている。「看護の独自性は、医療の介助よりも、療養上の世話にある。しかし、それだけの表現では、概念自体に独自性と積極性を認めさせることは困難である」⁽¹²⁾として、したがって「問題は、看護的認識が医師的認識といかなる差異があるかということを見つけだすことである」⁽¹³⁾と指摘し、中川はその差異を医師的認識の性格が患者の病像の形成を目的とした空間的認識として特徴づけられるのに対し、看護的認識の性格はむしろ病者の生命的存在としてのリズムの時間的認識として特徴づけられるとして、それを次のように述べている。

「時間的な認識とは、空間的認識を主とする医師の場合と違って、視覚的な印象をとるにしても、＜見分ける＞のではなく＜見守る＞ことのなかから形成されるもの、聴覚的な印象にしても、＜聞き分ける＞のではなく＜聞き取る＞ことのなかで形成されるものといえる。(中略)生体現象は多くはリズムカルな形態をとる。そのリズムの乱れが看護的認識の一つの原則であるといってもよいであろう。もちろん脳波とか心拍などの比較的急速なリズムは医師の空間的認識様式にも入っている。しかしもっと長いリズムは、持続的に病者のそばにいる看護婦でなければできない。しかも、この場合のリズムの認識は、その振幅やテンポを分析するのではなく、人間が音楽に耳を傾ける場合のように、リズムのなかに融け込む形でそのなかの運動感や違和感をつかむのである。」⁽¹⁴⁾(＜ ＞は筆者挿入)

ここで中川のいう「看護」という概念は、もはや単に領域的ないし技術的な概念に止まらず、それは対象へのかかわりとその理解における方法論的なそれとして積極的に概念化されているといえよう。

さらにまた、経済学を専門とする社会学者の内田義彦は現代における学問と人間のかかわりに関する「方法を問うということー看護人的状況としての現代における学問と人間ー」と題するエッセイにおいて、「職業の如何を問わず、科学と人間との相剋を感じ、克服せざるをえない現代の人間状況」⁽¹⁵⁾を表現するものとして、「看護」ないし「看護人」という概念を提起し、その意味を次のように述べている。

「学問が進化すると対象だけが細分化されるのではなくて、研究主体自身が部分人間になるのである。極限状態として＜医者でない外科医＞を考えよ。彼は一人の医者として一人の人間である患者に対するのではなく、一人の＜外科医＞として、＜外科の一患者＞に対する。

何々の病根さえ摘出すればいい。それが外科医たるおれの仕事だ。こうした部分人間による部分科学の総合化が試みられても、科学によって部分人間化された人間は救えない。』⁽¹⁶⁾しかし「人間を物化し量化する科学の方法と操作によって＜全体としての人間＞の生命の存続と充実が可能になったということを、歴史的事実としてわれわれは認めざるをえない。』⁽¹⁷⁾したがって「人間を物として取り扱う科学を拒否することもできなければ、それに包み込まれてしまうこともできない——そういった科学と人間との格闘に、他人事としてではなく、その場その場の状況に応じて、しかも瞬時の決断によって、身をもって参加せざるをえないもの、それが現代に生きる人間であり、その人間の宿命を極限状態において日常意識せざるをえない存在として、私は看護人というものを考える。』⁽¹⁸⁾

内田がここで提起している「看護人」という概念はしたがって、上でいう例としての＜医者でない外科医＞に代表されるような人間理解（「科学によって部分人間化された人間理解」）の中にありながら、しかしそこにおいて、どこまでも部分を統合する全体性（wholeness）としてその人間を理解していこうとする人間の存在のありようを意味するものであるといえよう。こうした中川や内田の提起する「看護」という概念の理解の視点は次にみる意味での「臨床（的）」（clinical）という概念にかぎりなく近いもののだといえよう。

（２）看護をめぐる「臨床」概念の意味

通常「臨床（的）」（clinical）という概念は、医学における「基礎」と「臨床」の区別に代表されるように、多くの場合、人間に対する「治療的」かかわりを意味し、したがって「臨床（的）」とは、例えば病院や福祉施設、あるいはカウンセリング・ルーム等、患者やクライアントの治療、看護、介護、相談が行われている「場」を指す概念として一般的に理解されているといってもよからう。例えば、特に「日本語の臨床（的）」の語はとかく医療という業務の現場に身を置く人々の間でだけ特権的に用いられてきたように思われます。例えば同じナースでも、病棟や外来に勤務することは臨床と呼ばれ、看護教員になることは＜臨床を離れる＞といわれます⁽¹⁹⁾という指摘は、臨床（的）という概念が一般的にはそうした「場の概念」として定着していることを意味しているといえよう。

しかしながら実は、日本語で「臨床（的）」と訳される英語のclinicalという言葉は、もともと「ヨーロッパでは古くから、牧師が死の床にある患者のベッドサイドにいて、患者のために祈り、聖餐を与えることを意味していました。それは全人格を投入して病室という場に患者とくともにいる＞ことなのでした。医師がベッドサイドで治療する、という意味は後になって生じたものです」⁽²⁰⁾ともいわれるように、それは「場の概念」であると同時に、というよりも、それは本来人間の対人的行為における「態度」ないし「方法」を意味する概念である。したがって、「臨床（的）」という概念は、「場の概念」としての「場としての臨床（的）」

という意味と「態度ないし方法概念」としての「態度・方法としての臨床（的）」という二つの意味を有した概念である。⁽²¹⁾

「臨床（的）」という概念のこうした吟味からあきらかになることは、看護という概念をいわゆる医療の場での領域的な技術概念としてとらえる限り、そこでは「臨床」ないし「臨床的」とはどこまでも「場の概念」であり、それは医学と同様「治療的」概念として理解されよう。しかし先述した中川や内田の提起する「看護」概念に目を向けるとき、そこでの看護にとって「臨床」ないし「臨床的」という概念は、人間理解における態度・方法の基本的なありよう（「ともにいる」）を意味する概念としての理解をわれわれに求めてくるといえよう。Iの（2）でみたナイチンゲールのいう「この世の中に看護ほど（中略）、自分自身は感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである」という言明も、また中川が患者の病像の形成を目的とした空間的認識としての医師的認識に対して提起する、患者の生活の「リズムのなかに融け込む形でそのなかの運動感や違和感をつかむ」ことを目的とした「時間的認識としての看護的認識」の指摘とその性格づけも、さらにまた、内田の「科学と人間との格闘に、他人事としてではなく、その場その場の状況に応じて、しかも瞬時の決断によって、身をもって参加せざるをえないもの」としての「看護人」という概念の提起も、ともにそれらは、「看護」概念そのものをここでいう「態度・方法概念」としての「臨床」への視点において捉え直そうとするものであるといえよう。

（3）看護社会心理学における「臨床」概念への視点

すでに心理学においては「臨床」という概念は、臨床心理学や心理臨床という言葉の定着にあきらかなように、医学と同様、「治療的場」における心理学の研究として、それは「場の概念」としての歴史とその概念に基づく心理療法の実績を有していることはいうまでもない。そしてまた、そうした「場としての臨床」概念は近年社会学においても「臨床社会学」という言葉でわが国でも提起されてきている。例えば野口裕二（2001）はその編著書「臨床社会学の実践」において、「臨床社会学」という言葉の使用の多義性を指摘しながら、しかしその多義性にもかかわらず、そこでは「臨床」という言葉は社会学にとって相関連する三つの意味におおよそ整理されうるとし、次のように述べている。

「（前略）＜臨床社会学＞という言葉の使い方、この言葉に託す思いは論者によってさまざまである。ある人は、＜現実に密着した＞という意味で用い、またある人は、＜臨床現場の＞という意味で用い、また別の人は、＜なんらかの診断と処方をする＞という意味で用いている。第一の用法は、＜フィールドワーク＞という方法と関連し、第二の用法は＜参与観察＞という方法と関連し、第三の用法は＜応用社会学＞という方法と関連してい

る。」⁽²²⁾

こうした臨床社会学における「臨床」という概念の意味理解に関する野口の整理にみる三つの用法はともに「場の概念」としての臨床概念がそのベースになっているといってもよからう。それゆえ、これらの用法にもとづく臨床社会学という言葉は、さまざまな「臨床現場の社会学」の可能性を提起していることはいうまでもない。本稿のⅠでみた看護社会心理学を構成する二つのアプローチにおける「看護についての社会心理学」という主題化は、ここでいう臨床社会学と同様、看護という「臨床現場の社会心理学」としての意味とそれゆえの「場の概念にもとづく臨床社会心理学」としての期待がもたれるであろう。しかし他方、もう一つのアプローチである「看護からの社会心理学」という主題化は、社会心理学における人間理解の基本的態度・方法としての「臨床的態度」ないし「臨床的視点」を看護概念そのものの中に発見していくという意味とそれゆえの「態度・方法概念にもとづく臨床社会心理学」としての期待がもたれるといえるのではなかろうか。

そうした意味で、現実の看護現場の看護者や看護を専門に学ぶ看護学生にとっては、「看護社会心理学」を学ぶ意味はより＜前者のアプローチ＞に、他方社会学や社会心理学、更には社会福祉学を専門に学ぶ学生にとっては、「看護社会心理学」を学ぶ意味はより＜後者のアプローチ＞に求められるといえるのではないであろうか。

おわりに

本稿は、「看護社会心理学」の講義をいかに構成し、その教育の視点をどのように主題化するかという問題意識の明確化を今後さらに計っていくため、看護概念をめぐる研究ノートとしての第一段階の覚書にすぎない。したがって今後の課題として、看護という概念をめぐる「社会心理学論」としての論の展開と、それをさらに筆者の専門とする臨床社会福祉学の基礎論へとその考察を進めていくことが求められていると自覚するものである。

〔注〕

- (1) Florence Nightingale, Notes on Nursing: What it is and it is Not, 1860 (湯楨ます・薄井担子・小玉香津子・田村 真・小南吉彦訳「看護覚え書」現代社 1994)
- (2) ヴァン・デン・ベルグ, 早坂泰次郎著「現象学への招待—＜見ること＞をめぐる断章—」(ヴァン・デン・ベルグ, 早坂訳「現象学としての看護」) 川島書店 1982
- (3) この感想文は、順天堂医療短期大学看護学科の2年次生を対象とした平成13年度前期開講の「社会学」の受講生によるものである。
- (4) 早坂泰次郎は、社会心理学を専攻するものでありながら、精神医学書であるFrieda Fromm-Reichmann, Psychoanalysis and Psychotherapy, 1959 (早坂泰次郎訳「人間関係の病理学」誠信書房, 昭和48年)を自ら翻訳した意味について、同翻訳書の「訳者序」において、「私

にとって、いな、＜人間＞を問題にする社会心理学徒や、人間の問題の重さに日々たえようと
する管理者、教師など多くの人々にとって、フロム・ライヒマンのこの書物は、人間的なげま
しをあたえるとともに、＜社会心理学基礎論＞としての科学的意味をももつと私は確信してい
る」（同書、「訳者序」p. iv）と述べているが、筆者がここでいう「社会心理学基礎論」とい
う言葉も同様の意味である。

- (5) Florence Nigtingale , 前掲訳書, p.217
- (6) ヴァン・デン・ベルグ, 早坂泰次郎著, 前掲書, p.77
- (7) Florence Nigtingale , 前掲訳書, p.217
- (8) 同上書, p.219
- (9) 同上書, p.221
- (10) ヴァン・デン・ベルグ, 早坂泰次郎著, 前掲書, p.98
- (11) 中川米造「医療のクリニッカー＜癒しの医療＞のために－」新曜社, 1994
- (12) 同上書, p.171
- (13) 同上
- (14) 同上書, p.174
- (15) 内田義彦「学問への散策」岩波書店, 昭和50年, pp.317-318
- (16) 同上書, p.316
- (17) 同上書, pp.316-317
- (18) 同上書, p.317
- (19) 日野原重明編「アートとヒューマニティ-Quality of Nursing= 1」中央法規出版 1988, p.51
- (20) 同上書, pp.50-51
- (21) 足立 叡「臨床社会福祉学の基礎研究」学文社, pp.95-96
- (22) 野口裕二・大村英昭編「臨床社会学の実践」有斐閣, 2001, p.i

Research Note

An Essay on Social Psychology in Nursing

—Clinical Social Psychology's Views on Nursing—

Akira ADACHI

This paper aims to examine into the significance of considering 'nursing' as social psychology and aims to outline for defining the methods of clinical social psychology, which an interpersonal care such as nursing carries.

Therefore in Chapter I, I have introduced two approaches for treating nursing as social psychology, in other words, constructing the social psychology of nursing. One of the approaches is social psychology 'about' nursing and the other is social psychology 'from' nursing. The former approach targets to analyze and explain nursing as a human behavior and also the meaning of the scenes that nursing as a human behavior takes place. On the contrary, the latter approach aims to understand nursing as social psychology itself, that is to say, understanding an interpersonal behavior of a person which is called nursing and the interpersonal relationship of a person in nursing.

In Chapter II, I have made a basic examination on two concepts, which makes the social psychology 'from' nursing, the second approach from the two approaches that construct social psychology of nursing, as the clinical social psychology. One of the concepts here is 'nursing' and the other is 'clinical'.

Lastly, I tried to show the possibility of understanding and conceptualizing the nursing as the clinical social psychology itself through the examination of the concepts mentioned above.